

回胴倒錯者

— PACHISLO FREAK —

出 発

私が勤めだしたその店は、新規開店の店だったので、従業員は全て横一線のスタートだった。グランドオープンまで数週間あり、それまでは皆チェーン店に振り分けられ、研修が行われるということだった。個人個人が研修店舗を勝手に決められ振り分けられていく。それなのに、私と2人の女性だけは何故か研修がなく、その依然工事中のグランドオープン前の店舗に残留となったのである。これは業者から次々と運ばれる荷物の整理や、チラシ・ポスターの作成など、オープン前の店にも仕事がたくさんあったからなのだが、私としては店員としての経験はなかったし、他の皆にいきなり差がつけられるのが嫌だったので、研修に行きたかったのが本音だった。

見慣れない機材や工具、部品などが次々と運ばれ、そこは目新しきで溢れており、普段、打ち手としてホールで見るとは全く異なっていた。それらを見ては不安になったり、なにかワクワクしたり、その道具の使い方を予想してみたり、いろんな感情が交錯していたのが妙に印象深く記憶にある。もちろんそのモノの中には良く見慣れたものも多数あった。ピカピカに光る真新しいメダルやドル箱、機種ごとの小冊子など、それらは皆、私に期待と安心感を与えてくれた。この感覚は、道に迷ったときに知っている建物や看板が目に入ってきたときのあの感情によく似ていた。

店長の機嫌もよく、時折ご飯をおこ

てくれたり、飲み物の差し入れがあったり、とても快適に、そして楽しく仕事をすることができた。ただ、この頃の店長の口癖は「開店したら厳しくなるから、今のうちには甘えとくといひよ。今辞めてもらつても困るしね。」というものであり、その言葉と、それを発している店長の顔がいやに気味悪く、その場の空気の中では、苦笑いするのが精一杯だった。

合 流

オープン一週間前になると研修組が帰つてきて、依然外装を工事中のその店に集められた。私より若い者もいれば、年上もいる、かなり年上もあり、私の年齢は丁度みんなの中間辺りだった。研修グループ同士は面識ができたのか、それぞれ思い思いに会話をしている。私もその中の、仕事ができそうな30代半ばくらいの男性に話しかけてみた。もちろん質問内容は研修がどんなものだったのか、ということに他ならない。その男性も、私がこつちで何をしていたのか気になるらしく、根掘り葉掘り聞かれ、実質上の情報交換だった。そんな中、私が話をしているときにそれは起こった。店長が片腕として連れてきた主任から、ホールに集まるように言われたのだ。そのときの研修組の行動の早いこと早いこと、皆がいつせいに飛び出し、ホールに整列したのである。その男性に聞いた「とても厳しかった」という研修がすぐに理解でき、同時に「みんなとの出遅れ」を痛感させられる瞬間でもあった。

その場ではこれからオープンまでの大

まかな予定が発表されただけで解散となったのだが、私にはその予想以上の厳しさがどうしても頭から離れることができず、その予定すらうろ覚えの状態だった。研修で辞めていく人もかなりいたと聞く。はたして私は大丈夫なのだろうか？期待や不安が入り混じっていた今までの感情はすでになく、このときは確実に不安感で覆いつくされていた。

その一週間は挨拶の練習や、歩き方の練習がメインだった、噂通りの厳しさではあったが、悲観するほどでもなく、常識範囲内でもあったのが、何故か台の知識を全く教えてくれなかったことだ。簡単なエラーの解除方法や、台の仕組みの説明があつてもいいはずなのに、それらの説明は一切なかったのである。唯「嬉しい仕事といえは「打ち込み」で、ストック機が全盛期だったこの時期にはなくてはならない作業だった。ピカピカの台にピカピカのメダルを使つて遊技する、さらにタダなので普段できないことをやってみる。わざとバ

開 店

みんなとも、また、その仕事の雰囲気にも馴れ、皆の会話が弾みだした頃、とうとうオープンの日がやってきた。季節は冬で、かなり寒さが増していたにもかかわらず、前日から泊り込みで並ぶ人もかな

確 率 の 話 ②

りの数だった。昔、マンガラを打つために夜中から並びだした記憶が、並んでいる彼らと重なっていた。あのころの私がそうだったように、彼らもきつと、どうしても打ちたい「何か」があるのだろう。そんな彼らを見ているうちに、お客さんの並びは瞬く間に増えていき、それはまさに長蛇の列と言うにふさわしい状態だった。すでに台数以上のお客さんが並んでいるようにも見える。初めてのホール業務がグランドオープンで満席、大開放、という状態である。今日がこの仕事で最も忙しい日になるのは間違いない。みんなもそれを意識してか、表情が強張っていくのが誰の目にも明らかだった。しかしそんな中でも、唯一、ある人物だけが、笑顔を絶やさず、並んでいるお客さんの質問にも軽やかに答え、まさに余裕の姿勢で待ち構えている人がいた。それは店長でも主任でもなく、私と同じ制服を着た一般従業員のMさんだった。

今回は確率の独立性と収束について少し説明します。先月号で説明したように、250分の1の台が500回転以内で当選する確率は90%ほどです。では400回転まで回して未だ当選していないとすると、残りの100回転での当選確率は90%なので、100回転で当選する確率は90%の2乗、つまり81%になります。これを期待するにさらに500回転必要になるのです。確率の独立とは過去の終わった事象には関与されないということなのです。これは確率の低いものに対しては非常に厳しい現実となりますが、確率の甘いものにしてみれば、かなりありがたいような感覚をおぼえると思います。例えば、先月号で例に挙げた継続率90%の確変ですが、8連荘する確率は概ね50%でした、しかし、確率は独立なので他の試行には関与されず、毎回90%で当選ということになります。つまり、次が継続である確率90%が常に続くというものです。1回継続するたびに、「次も90%で継続！」と考えれば、長く連荘しそうな感じがします。

次に収束のほうですが、これは非常にポジティブであり、ネガティブな考え方といえます。結果からいうと収束とは「確率とは、その本来の確率に近いこととする」ということです。例を挙げると、「コイントスを行ったとします。裏と表の出る確率はそれぞれ50%です。しかし実際は3回投げて3回とも表だったりと言うことも十分あります。この場合、表の出る確率は100%でした、しかし本来は50%でなければいけません。ここで、本来の確率に近いこととして、次から裏が多め

に出るだろうと予想されます。1万回、100万回と試行回数を増やせば、きつと50%に極めて近い値になっているでしょう。これが確率の収束というものです。この考え方はスロットやパチンコでも良く使われる考え方です、大ハマリ台を好んで座る人などは自然とこの考え方をしているのだと思います。「3000回転も回してあるのにまだボーナス2回設定1でも3000分の1だから、今から8連荘してもおかしくない！確率は収束するからきつと3000分の1まではいくはずだ！」なんて考えてしまふのは私だけではないはずです。この考え方は非常にポジティブといえます。なぜなら、「それだけ当たりにくい台だから設定が悪い、確率は独立だから今の回転数なんか関係ない」と考えて座るのを避けるのが定石だからです。逆にやたらとボーナスに当選し、まだ総回転数1000回なのに、すでにボーナスに10回も当選している台があるとした。設定6でも240分の1なのにこれは当たり前すぎです。収束を考えると「今から1400ゲーム以上のハマリが来てもおかしくないから、座るのは避けるべきだ」となり、非常にネガティブです。しかし独立を考えると「これだけ当選しやすいのだから設定6に違いない。確率は独立だから今からハマルとは限らない」このようになります。どちらが正しいともいえませんが、収束論は、もしかしたら昨日は大ハマリ連発だったかもしれない、などと考えるときりがなく、非常に曖昧なものになってしまします。比べて独立の考え方は、今現在の確率を考えると、私としてはこちらのほうが、正しいのだと思います。みなさんはどのように感じるでしょうか。

A氏プロフィール

三重県出身。三重の高校を卒業後、進学のため大阪へ。学業よりもパチスロに専念してしまいお決まりコースの大学中退。中退後3年間はパチスロで生計を立てる。その後サラリーマンになるも副収入はパチスロで。結婚のため三重に戻りホール店員となる。現在は知識と経験を生かし某店で設定師として手腕を振っている。目押しレベルはスライの種まで直視できるほどの異常っぷり。

回胴倒錯者2周年記念イベント in スーパーマン

日時：1月15日(木)AM9:00～ 場所：スーパーマン伊勢店(伊勢市内)

全198台中、1/3が最強&最高

県内外を問わず、スロットファン&回胴倒錯者ファンの皆様、ぜひお集まりください!!

★倒錯者イベント★

先月号の予告どおり、倒錯者2周年のイベントが開催されます。開催に協力していただいたスーパーマン様、まことにありがとうございます。また、スロットの方の期待を大にしているこのイベントに参加していただけたらと思います。